

「ありがとう西高！」新聞

発行元：「ありがとう西高！」実行委員会広報室
Mail：nishikouarigatou@gmail.com
#ありがとう西高

Instagram：nishikouarigatou
twitter：@nishiko_arigato
ブログ：https://thanksomiyawest.blogspot.com/

閉校行事について詳報

大宮西高校の閉校まで1ヶ月半。3月中旬に控えた大宮西高校の「閉校関連事業」にのイベント詳報をお伝えする。最新情報は公式ホームページを参照のこと。

公式HP：<https://www.nishikouarigatou.com/>

イベント詳細決まる、告知活動も

西高の校舎に立ち入ることができる「ホームカミングウィーク」が来月、行われる。3月16日(月)から20日(金・祝)の5日間、10時から16時(20日のみ9時から17時)西高の校舎が開放され、教室にも自由に入ることができる。祝日である20日は「思い出授業」と題して、昭和から平成にかけて教鞭をとった伝説の先生方による特別授業が行われる。往年の名調子を懐かしい教室で聞ける一度きりのチャンスだ。駐車スペースはないため、現役当時を思い出しながら公共の交通機関で向かって欲しい。バス停「西高校入口」はいまだ健在だ。

閉校式と大同窓会は3月21日(土)に大宮駅前のソニックシティ横のパレスホテル大宮で実施される。

閉校式は14時から、パレスホテル大宮3階チェリールームで行われる。こちらは公式の式典で、一連のイベントでは唯一、フォーマルの服装規定があるため要注意だ。その後16時から、同4階ローズルームで大同窓会も開催される。1期生から56期生までの全卒業生と関係者が対象で、こちらのみの参加ももちろん可能。参加費は一人1,000円(小学生以下無料)となっている。立食形式で、子連れ

やPTA・保護者の方も大歓迎とのこと。この日のために撮影した記念映像の上映や、各卒業生有志によるパフォーマンスなど数々のイベントも予定されている。

これらのイベントに参加するには、大宮西高校閉校事業実委員会のウェブサイトから参加登録が必要で、詳細な内容についてもこちらから確認してほしい。

2月9日から9日までの1週間、JR大宮駅中央改札口広場に「#ありがとう西高」と大きく書かれたフラッグが掲出された。西高の閉校や関連イベントについて告知するもので、撮影や制作も西高卒業生が行った。多くの方が見上げたり写真を撮ったりしていたが、そのうちの一人にお話を伺ったところ、20年以上前の卒業生で、このフラッグで閉校を知ったとのこと。「さびしい気持ちが大きいが感謝も大きい、まさに、ありがとう西高だ」と話してくれた。



大宮駅「豆の木」上のフラッグに掲出されました。

大宮西高校 閉校事業スケジュール

3月16日(月) 17日(火) 18日(水) 19日(木) 20日(祝) 21日(土)

「ホームカミングウィーク」
大宮西高校にて

「閉校式/大同窓会」
大宮駅前・パレスホテル大宮にて

▼特設サイト



記者在学時の卒業式。終了直後の様子(05年)

あの行事は、今

- 卒業式編 -

卒業式は、高校生活という人生の章にピリオドが打たれる行事だが、実際には節目なく等速に過ぎてゆく時間に、人間の都合で目印をつけるだけでしかない。記者もまた、卒業式を数ある行事のひとつとしか捉えられていなかった。新聞部と生徒会に所属していた記者にとって、数少ない、運営に関わらない行事だったこともあってか、ほとんど進行を見守るだけで終わってしまった。終了直後、色とりどりの風船が舞ってクラッカーが鳴り響き、飴やお菓子が飛び交う光景も、それを穏やかな顔で見守る先生方も、ファインダーの中に流れるどこか違う世界のものとして見えていたように思う。

この慣習は一時期見られただけで、他校ではあまりないものだったと聞く。高校生活の集大成でもある卒業式は厳粛な雰囲気で行われるのが普通かもしれないが、そこはやはり自主自律を重んじる西高で、式の最中は大人しくする代わりに、終了したら自由にやっつよいという暗黙の了解があったのだろう。義務を果たすことで一定の自由を得られるという社会の縮図がそこにあっただけで、先生方もそれを意識していたはずだ。あれはまさに体験型の、最後の授業だった。

卒業後も記者にとっての西高は、いつもいる場所から、いつでも帰ることができる場所に変っただけだった。実を言うと今も、閉校という事実の実感が湧かないままだ。もしかしたら、3月に学校という役目を卒業する西高を見送ることで、今度こそ西高を卒業できるのかもしれない。(石川)

大宮西高伝

ダンス留学、後押ししてくれた担任に感謝

島津 藍さん（ダンサー）

もし知らなかったら、ネットで検索してほしい。米国を中心に世界で活躍するトップダンサー、島津藍さん。マドンナ、ビヨンセ、ファレルウィリアムズ、ケイティ・ペリーなど超有名アーティストのコンサートのバックダンサーとして第一線で活躍している。彼女は西高ダンス部OGだ。世界で羽ばたく島津さんに、西高時代のエピソードをお伺いすることができた。

西高で出会ったダンスという世界

まず、西高を選んだ理由について聞いてみた「中学の憧れの先輩を追いかけて。制服が可愛いのもあったけど、その人が西高に行ったことをきっかけに、志望しました。その先輩と高校以降何かあったわけでもないんですけど、当時はそんな理由で」と答えてくれた。西高時代いちばん印象に残っている活動は、やはりダンス部だった。「当然ダンス部に入ると決めていました。たくさん練習したことが記憶に残ってます。1階にあった購買部の近くの廊下で踊ってました。ダンス部用の鏡がなかった時代でしたね」。

島津さん、実は3歳の頃からバレエを習っていて、高校入学前の将来の夢はバレリーナになることだった。そこから西高ダンス部を通し、ダンスの道に目覚めることになる。所



「マドンナツアー」帯同中のポルトガルから、Skypeでの取材に応じてくれた。右写真はマドンナのInstagramから

属した「ジャズダンス」のチームが転機だった。文化祭の発表に向け練習していくうちに、島津さんはのめり込んでいった。

当時のダンス部は、曲目、演出プラン、振り付けなど、ダンスに関わることを全て自分たちで決めていた。チームで話し合い、一つの作品を練りあげることは、島津さんの性に合っていたようだ。島津さんは当時の経験について「スケールは違うかもしれないけど、最初から最後まで自分たちで作った経験は大きいです。今の現場でもかなり生きていると思う」と振り返る。

進路を応援してくれた担任に感謝

西高ダンス部をきっかけに、ダンスの世界に興味を持ち、どんどのめり込んでいった島津さん。求める理想のダンス像は国内では見つからなくなっていた。島津さんは、西高卒業後にニューヨークへとダンス留学することを決断。現在の活躍へと至ることとなる。

「進路指導で、先生から反対されるんじゃないかと不安だったけど。担任の石井先生は私の決断を尊重してくれて、応援してくれた。本当にありがたかった」当時の担任は、英語科の石井誠先生。既に西高からは転勤されており取材できなかったが、機会があればその時の話をお伺いしたいものだ。

島津さんは西高卒業後、ダンス留学で米国ニューヨークへ。それから12年。本紙面では語りきれない数多くのエピソードを経て、彼女は世界で活躍するダンサーへと成長した。

あのときに楽しんでおいて良かった

最後に西高全般の思い出を伺ったところ「THE・青春！」と即答。「全部が青春。休み時間、放課後。大宮駅で遊んで帰った日も大切な思い出。ダンス部で遅くまで練習した日も思い出。あのときに楽しんでおいて良かったです」と頂いた。世界の舞台とはまた別の魅力が、西高にはあったようだ。